日用心法鈔

中

ロ g
1303
2

日仁9
1303
52

日用心法鈔巻之中

雜波戰絶は高ひくの虫後の甚器といふ事あり。驚屋と
号べき器あり。器の甚器の大小は其人の志たる時に適じ
事は有りぬ。しかし下虫にて心よろしかるべきもの
貴一有り。虫後ある器をもつて屋敷
抱ふ山頂といふことあり。廉は入細は入て考へべし。又也。方便
波いつのべ一人をだすもの。也虫心成えてもべ一
砂の湊といふ書に云く。昔より。微と塵と通用して

偽りの。あるべきものなり。なほ上古よりいひあやまり誠に
あり。後世の人のいとくるしみとなる。今世俗の
人深く方便の用ゆる場合。たとへば人の頭をうちたゝく
くれたる男の子をうたんとするの。
憤りあるさまなれば。是を扶けあらんと甚だ
さるべきものなりとなり。されば。今世俗
海をが如。是誠に取扱ひの方便なるべし。
類ひ。わげてうどく雖。この方便を偽と
甚だのうそ。みもわり。又正義法は虚偽を構へて人をすゝ

だまし。おどしなどの。畜類の捕あり。又は偽をたくしむべし。
是いかにもむてつ。法得ざるに用ゆべし。
又商人の常を看て。方便をいつわり。若貴人が素て。ものを物と見
て。是い銀より高き。おどしの財。丈ものを物が遠てのべつ
四使ごろ。又い甚虚偽でほ。
す。又い賜より安く。是とす。扨いつも。方便銀財の
吉相の接接といふものをもて。最ものあり。是い向の
寄と安心さるのをもて。又えより。悪魔拙ぶ。といふ。
空偽りにして。仏神を恐ます。商賣尽無名とあり。是

惜むべし

又仮紙商賣でも買うづり買ものあらばとも買ひ兼ねて換とる米に又安き物を買迎盃おつかうる事あるべし。わげて賣ること勿論又うるさ物と買迎盃おつかうるさんだ。安くうるべしとこゝ千きのあるし附の塩和して徒にてのうち

まぬ米ゆり拾ふる俵てら換ものて賣米ありこの工夫。

商人呉服屋の問ひ米うち大賣屋はかり仮綿のいつざるべ。

各くの了簡よりわるべし。拙が篤と考へぬ米とも思ひます紙

書ものを。

○商人のうる利とうるべ正直なるべくさのお場よ賣が世の中

糸作り人お続るさ女の渡る糸箱といつわり。拙箱に商人

のうるべき箱あり。細きえまの糸箱のこまのきんぎん縄

くらゆがくさくおりれば銭金のすうる米ぜよこまがはべ

でするが如し。拙箱ある人に発角きんぎん所くしなに

○世代渡るべう樽のおりかるべさの縄ようにのさ先代仕吉

拙人をきりて辛抱を絞きべきんぎんきくきんが縄り

ゆしき米にあるものし発角きんぼうとぷ直をえを

せきべ。人の見紙をもん人とたべうしおどきべうべ。

窓業のさ[illegible]筋辛抱の
[illegible]
[illegible]
[illegible]
あり金銀の[illegible]
[illegible]人大切釈人切と云
[illegible]
室の山よりくるとうれびを

又幸抱心安心の道こそ世をくらしの糸箱なり。
然りとてこれをわらうべ
安く買出して安く賣り福徳の箱をこそ買出して
うるべく賣り賣りの箱こそ見いだす秘密にてぶりうの者の
ものなる宝なれ智者見を深く考くよ
稚講釈にも一賣り買ふ一人とふりんこそ
ものを買ふる者人とだに利とするの商ひ繁昌と春
せるやうなれぬ金とりの者人とはきこえて我一
や利をきる者いかにいかにいかにて意悲あるけと

もくべくこうい文てあるりの施をきべ者人との憐れま
ぬ者いの祖先人を供けてもかくすの接ものこうい
すべの出世せべ商ひ繁昌不繁昌とあるい福の神の情を
あんべ人をべきのと例くく福の神が拾出ひあるの
家人指形ひあり拾又信法を信すり自親と大切
に父子供を愛又婦中くく一家祝と勝家業を
出情ものく為くべ身持くもて骨をおくすべ友達に
深切とを欲とはあん意悲深く。心安ある者天の世間澄
にうあひて天道恢くり福をあるべけあるとあり見ふ

相遠故。ものたる事あり。捨置ものあり。世の中せくら。
ものたる事をもたる通りにもたる計りくもたる事成。
知れたる通りもせぬ人に世界のいひ事が絶ぬ。ものたる
たる通りみもる成智者といふ。ものたる通りにせめて愚者
やいふ考くもく
知恩院立ん大傍正の出方歌を云く。高家の有世を浴場
し。実にも世界の宝宝あり。宝と善途に用ひあり。二世
の利益しものあり。ぬべし利信ぐかりみりくあるて。街
債のことをしくせば自然と其分に報ひ来りて長い

栄く有男女で美しくのくと。扨にもるあんがあるいてはぐ
さぐ丁寧正直る分とおもて。仏神を信仰し。倹約質
素を第一とやるべ。家業出る事疑ひあり
又昔より高貴卑賤もんぐ。各別仕出
たる事あるさい元よりあるものしも。浪人奉公者
のくし又徳ぶ徳ぶ吟味ふしいふ。
おくべし。又ものより養蚕もるにも及ぐ。貝原篤信の教
家例にる。年中の入用とやぶ一銭一毫を不実の入用
をもべしとおり。所見尚成行て斗しべ。所後奇

備合ふ家とちがひて相違あり是は相違あり
悟りて世界を見て考へ動く相又始ふいの如く意相
の不とする故先陸下虫を意ぐ一物を見る新ひなし
是うち米を求おもへ法義絶結絶漢書を有て佛智
人の倫しめ遠礼をしうち迎て行ふ
相又出世家人ものに運よりやういくの是又一聖の
米をおもへ自力のなぬやうにそくしの是
ぞ惡行の悪親のりけ色合を考ひ身代
とほうがの高い方れ稀あり是

運をおもへ仕方の惡業米ある相とも利相にて貴ある
人のはんぐの大方い世智利口の報みて冥加の居宝沢好
すべ家業不情の放く甚世智利口惡利口といくるい邪会
みて米をたくさやうに殺さぶ彼人を一度くあんうくせば
秋人とたがかるべくと惡了貧のくんぐけて米を殺を故
甚間のい日べの言葉と放合せざる米のいくべ人の合点
やうぬ男と油断せざるやうにある者くたたるさうはめ
ふくくもおれべく。甚後い様のおるうくて惡業思ひ
てべくのかくう用ムもて取合ぬやうにあんだ一生立身

そうとゝのゝぐゝ。世のの米に其利益と実らを用ひ貧の
拙の金銭入を下者を貴朝者のうせごに油断あく
人御あり。うあゝ貧用く条くを。無品さぐゝ。無くん運
不運といふこと。出正者を。油断あく。拝ぐゝ。せごに
遠付貧乏あゝ。みみ
○貧乏の拙の拝げ。あひゝ。ぶうまを。すく。あるの世の中
○運あゝ。こと人の難行苦行して其運をうめ。ぐんとする。
運の字七米　立家出家。儒者神道者。上下者を運くゝと
いくゝ。運の字七義理とゝ。ぐゝ。運とゝ。ぐゝとゝいふ米

に。こと。五言の。義。まゝ。用て。今生の種ひゝ。徳ひゝと。運び
出ゝ。あり。又ゝ世の。仕。あるみ。ひゝて。其。善悪と。まゝ。く。運び出ゝ
あり。是運の字七義理ゝ。無。運ゝ。不。善者。
中。ゝ。ゝ。ゝ。作。是。米。ゝ。ゝ。
たゝ。ゝ。ゝ。ゝ。義理の字。ゝ。ゝ。
是。義。たゝ。業。運び出。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
たゝ。業。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
善。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。運。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。先業

のゝ[illegible]あり。[illegible]儀を合点して。[illegible]あもゝ[illegible]を
あせり。惜る福徳が来ゝし。[illegible]悪と[illegible]あせり。惜る福[illegible]
あり。何ん[illegible]。福徳が[illegible]悪み[illegible]
見とゝく合点せず。運の字は[illegible]。[illegible]悪の道理も。[illegible]
[illegible]。[illegible]。運の字の字を[illegible]て。[illegible]の[illegible]を極
[illegible]。[illegible]運の[illegible]。[illegible]悪の[illegible]を[illegible]
[illegible]。[illegible]。[illegible]。[illegible]
[illegible]角分[illegible]。[illegible]五の十八と。[illegible]用[illegible]遠ひ。
[illegible]。[illegible]。[illegible]の[illegible]運[illegible]の

不相[illegible]の[illegible]。[illegible]の[illegible]の[illegible]。
[illegible]各別の業にあ[illegible]業を出情して[illegible]せ[illegible]
[illegible]。[illegible]業の生[illegible]ぬ[illegible]の中は[illegible]
[illegible]。世の中[illegible]
[illegible]。[illegible]。[illegible]。[illegible]
[illegible]。[illegible]。[illegible]。[illegible]
[illegible]。[illegible]。[illegible]。

木曾義仲うかゝ峠にて平家の軍勢を
打破り西海へ退き京都の政事をとり直す

あり是いかゝ始りたるとは甚だ拙なり寿永二年の
春平家奢りに長じ天子を蔑ろにし万民を苦しめ
中もとりとりの悪くて西海へ退き安徳の君をあぐ
家と西海の波へ退き安徳の君をあぐ而して義仲
不平の手ひ是を以て上天子より下万民のあげさ
以ての信せりは平家の仕置宜
敷しと中は是を以て義仲は朝敵なりとぼさる甚のち
信長三好をとりつぼ政事を乱せしを乱せしを
ぞるあるとして世分ち○あぐ〳〵世ぢ中のぐまん

らしこと二好で。べらい高〜〜さで。儀〜いぽ。人の跡和尚あるを
迫の。みてい。天明のあるまぽ。まつ世の治政半わんしぢ。和つに稲
絡ぢうん。係情是貢ぢうてい下の雑俵といひ〜しが。芸術の
寛政へまい世の治政半にて。世〜安穏なあ。減に有ぐ〜ごさ
御代〜ありう。ぢるよ〜ぽ。とてそんて。寛政に。服うつま
ぢ〜。倹約ぢて故世の中とだいあるまてといつぽ。以前天明
の財候を。持りし人。又。寛政の財候をそ〜〜るどのいか〜天明
とそぢうぢのぢう〜。寛政をしぢるぽてまあ〜ぢ。
〜ぢ〜〜る。見い去。無人あり。ぽ。仕方の。ぢ〜ぢ。治政

半にぬるといふとのこ。見ぢ〜〜ぢ。ぢ。ぢ。

ぞ。奢る長じ。上の目ゞ射構る形かゝのしぞ。人間の
分の不足と知り。人をうらやまずして。思ひ
見人の分限を。世の中を。上下別くべ。孟子の曰。王
者とは。ものを常おろんし。愚痴無智なる者。人も
日ゝ人の目。ことを見。改常なゝの。盛衰はおのれ
甚附ふぜんのうせるゞ不仕合なり。是部分の罪業と
天おもうべゝ。人をも恨べゝ。改常なゝ恨むる
常おろん。驚と心得るべゝ。改常なゝ恨むる
他奢の過ぎしゝ常なれて。藤穂集ふるゝ。火常拾

の附ふい。大名元ぞうり草履織。甚の猪馬。貴者は栗
毛の木綿羽織。馬はのゝぞる者。人の形の作ゝ
火常満人出。丈夫町人寺方に火常。樊楽ふるの迷
今ゝ火常碧東ぞうにも。鎧一両拵くる。形かゝるとわる。是
に和遠の
結窓漫筆ふるゝ。備前忌山の城。新右衛門の御行状
を。傍ぞうる奴婢の。ぞうる糸に。御一生涯自分は。捨ぞうる
釈世ぞうを。用ひ。ふれたるは。涯の代に。眞印丈夫
縄とおぞうを。後任べゝ。ふれて。丈にて。諸勘定の書付。

見るに及ばざること仰せられたる筆乃くたり。尚書ふいろく。其
子孫章いぢ。皇天ぎゃくを降さるのうちおそれ。上天
の載いろ。色の命〳〵臭の命〳〵〳〵

君。　院殿の御筆あり。又桃源遺事を儲たる
に西山公の御一せ黄色ある絹の廉を。ふ〳〵ゑのこと。
家のわげもろを御自分は拵がさんたる故よ。御迫色
付い命〳〵人くの。慥にい御色ざりしとあり。其勤倹の德可
仰可畏事。迫ぢ世よ。水戸頼房中納言殿光圀中納言殿
御二代の火事相織ぶんさいあり。べらに存立せりべらい水

戸の御建物〳〵でぶんさいの火事懲来い用ひさしあり。
賢君達の御製素布がさきあり下民のくいぢ。
世方くの思召と察してべらい日の者とあせぐ屋一奏の
恵義いつ事小使典とすむみも及ぶ〳〵奏り者の文
かぶ〳〵べらい御の事前地位とえてもちぐ奏士一字
天下さおりてべ天下とほろぼ思ぢ思におりてべ思とおろぼ
一人一家さおりてべ一人一家とおろぼ皆滅亡の種るあり
主君子廉人よりう迫困窮さんで恵金とは恵米とお
て分と害。家代おろぼ倹素さおて。国

為せざるべからざるにんげんくるる事。立身出世の道あり。倹約を張りて奢侈と成もの。精勤と立張りて怠りと成もの。意張と主張あり。強思と成もの。恭遜と立張りて闘諍と成もの。是〳〵彼〳〵此〳〵と分て治もの。天の福祐下るもの。福と下るもの。智術防慮の外に出てゆうんもの。雖ども。道よりさがくだる者。乃ち人もあり幽冥より福と福と福より福と。唯天の命あり。未来陰陽の徳滅とのみあるべからず。人は智力を捨て唯徳行修をして天意よりしらざるべし。古人事を思て天命を知るべし。智

力を棄べきにあらざれども。智力を宗とする者。道徳乃至慢者

ゆるべからず。以上錦城先生の

古人為福福の例。一切の事。皆天命に仕るべし。天命の情を知

身を安んじるべし。情に任せて天の義を仕るべし。見に依べ

甚だ甚家よりする者。あり。是仕べし。天命を知べ

知り難き事。と云て。せんとする者を苦しむるのこと

物毎成就すること。能力なるべし。天に仕る

のがいなるべし。云て。せんとする悪癖のいたりなり

常と形ひて色と考ふは天命のいろんとなる成ると成る
あり色のんが名利を好んで身心を苦しむる是則邪分と知
らぬとつまとのこと吳我はまづうらを通て天命を仰ぎんば
世界人畜くらいも仰ぎまとのあり古今にも
○世の中にむつかしの中にそうつくんだもんでおるこの
○仮の常の吳くば安る世の中に心と安びくらが身あり
世間のんとすく情ゑ人皆霊性あり是邪正心の文成
すると云て知ゑ形りとつくゑ自ゆるあるべき天命業固
縁と自ゆるもつく吳ふ故心の自成ゆる事ゆとゑ形

の為よんをつうひんの為に形成苦免もとさんが類例て
す海苦を通あり吳天命を仰せてさうみとあるんが
おのづつ自ゆるあゑ天道ふりぐうて色きゑ成愛と考え
にそう成る苦むあり是天の苦をまるにあるべきのんがき
や苦むありたくばんを身をすせてやあらるあ一切の
常皆浮世の為次第こ丈を仰ふせんとそうんたび
ある考ふこ居うの分と云て大家は仕業をるこんあつ
ぬ常こ云いてせんと欲せば大家勝て居と通を屋
ちんとやくば天道の仕業いゆるゆるおものこ我ゆ身と

もんて身をせむるがおやすいの甚義あり
荘子にいはく甚ふ術をもちぐるぐるさると知りてこれを安んぜる事。余の如くもちれば德の至りありと。世人は那ふ事のこひの德をけうずるかのごとくにぬるもちて是をあり。爰と是非ふ彼ふ彼ふにせんとするはのやすりさもあるべし彼ふ是非の事が。天命業因縁とおもうべきて改てあべべ。爰ぐ是を安んじ居ると智者しらず爰是る事ばかりたる人こそ福祐の人。天命業因縁おもべいや意ばよ。さ程ばかりぬ世上ばかりと知て

おそれつゝしんでうごかざるこゝろ。ぞくにたるこゝろ。ぞくにたるこゝろ。ぞくにた

生涯をおくる

○おのゝ〳〵とゝろざしをたてゝ家をおこすべき
世なり。すべてこゝろを用ゆ
切過自知録にいはく。凡人の世を貴ぶもの
憂て祈ひをゝこゝろざす。若祈ひ事わゝぶ必ずしも
人をいとこと矣角と愚て成就せんと求る及ゞ或は佛
神をいのり備天をちひとをうんすり呂一人ふ吉と爲べし
是福徳を求るの道なり。とのゝ是を捨遠かのごとあんでる。
富貴長命は世をさまるゝ人〳〵吉をもるにあり。其吉〳〵

いふ物の食をもとゝいふ物と稱ぶ。家業を勤免。
世をよろこぶともすべし。はくすべくはくすべの邪をあるべき事
せゞ〳〵の惡事をいとゝべの吉事をもとゝべ是吉吉あり。
世をいとゝ〳〵ものゝ食を捨てもるゝ
の津矢筆を賣る神のいるゝ。素人用ゆ手おもし支配とへく
てゆ〳〵部屋書付事をうるぬ家のゝ是る事を知りて
通をたのもし家福の家をあゝざるをもりて勤をもと
もる家拙是ゝ拙ゝさいてあるゝ部〳〵しのあゝぬ
〳〵ひゝみの他連をひゝとゝいくゝの家業不情にゝく。

人のけだかき人の家あるべし。かくて家和し
是栄とも栄とも栄とも。家業を出情して仕合不仕合を思
の間柄を命ずるなり。家内呉服を呉服屋
の間人と貴き神部〳〵栄の
せるやうな人の間ばかりでの貴き神の宿りて居る故
栄あるべし。皆栄すべしとあるべし。
くるべし。義をもつて人をもつぬべし。
あるべし。ぬるべしぬるべし
又世よりはいとあり。一生の計

富あり。一家の計は和合にあり。和合は在一身の計は動にあり。是大人用
あり。一家の計は和合と大栄とする。二國者は城を築
軍卒百万。兵粮十年にあり。人の和合あり。
あらざるべし。大坂城と云て大坂城は四方
名城大将名あり。元和合あり。故
和合といふは切の栄。根は敬と義とを上敬
ひとつとなるべし。
○朝夕ふるまひ。神仏をそのうくのこと
○特諸の書は何を。何なりとなるべし。

[illegible]人[illegible]義を[illegible]人[illegible]又[illegible]素[illegible]
人間一生紀[illegible]富貴[illegible]人欲[illegible]
高人或[illegible]変又[illegible]徒[illegible]
[illegible]家[illegible]
代[illegible]
[illegible]世[illegible]
[illegible]情[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]弱[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]家業[illegible]情[illegible]福徳[illegible]
の道[illegible]
○[illegible]
○[illegible]
古文[illegible]
[illegible]
[illegible]

屋ゝ〳〵いとべけれども換とる米あり時あと後時あさく
すてゝ耳あの日和とゆゝで晴て自立のもとあるべし兄と
為ざる時ハ福徳と換じ。天の忘るゝあるあ
○嘆がゝしゝ人の見ハいとゞうる。喜のいとらぬ身とまゝて
大悟ゝ意あるのあり
○時一ゝあれば求ゆる人も。来てゞ見る。梯橋の喜ハ見ハと
ゝべて富ゆるあるゝ。拾田畑ゝ出来る。麦も出ゆゝ
とすらて合ゝ。若為ゝ見て前方ハ見ゆ人ゝ。ゝゝ
ざるが如一切の米。皆うゝの如。甚時と待ゝ。書俗

にゝ時ハ出ん達ゝのも新ゝ時ゝ穀ゝ有恐ろ
敬米ゝ時ゝとすゝゝ。ゝ夏のとあり。他米も時ゝを
すゝゝを忘ゝ拾毎成就ゝ離ゝ怠んで時節と待ゝ。皆
平ゝ意変ゝ知ゝ。
水滸伝。自立人とあゝ。不自立人とあゝ。減ゝ
ゝう。上ゝ立人ゝ。一切のゝ人達。他不自立ゝとあゝ云
米とすゝゝ。ゝりて改て新伝自立と仕ゝあゝ。不自
立ゝ自立のゝゝ。ゝゝゝゝ。ゝ米ゝ。
ゝれゝ世ゝゝゝ身と怪ゝ人とゝゝ。みて穏家見ゝ

おこる。大きに人柄を失ひ。国家をくつがへして。福徳滅おこる。
上は立人の学ひ。見より新に。一切の万人たる人深く考へ
動く。又下に。不自立を恨ることをおそれ。不自立を仕合のなし
然不自立と。時と待ひ。切の事に急度
不自立をすつこび。急度時を待べ。彼人を捨事
すくれん事抱せよ〳〵
加て人と成て。家業と勤るに。吾事よりて安人なれば。
それにそなはいよ〳〵ていねいに急に家を利せんとして。
四海唯恵のことたく〳〵。悪のことを迯て善に放よ。自為と

物にそなひる側にて。影の形よりが如く。そなが善〳〵
如。甚多〳〵。それば新〳〵。甚多邪あれば新邪あり。
にすく新をつすく。ゆるかるく〳〵善〳〵。つをを
ゆるあるとも。甚身は新あり。新に天道に。行はれて。
ゆるくに天あり。人作と。ゆるくに。もうくらく。扱よわ。ゆ
に天道次第といくゆる。天ようかは次第とこの通ゆ
事をそれば。ようさて我わく。悪事を。悪業と。
動ゆ。天は私なし。天は次第とこのゆ。又むゆ。
悔むゆ。石田先生よりは。ようを。高ようあるて。つ。

で毒をおてゞゝゝゝ

のやむみい其子ある者ゆ。これおくべくいはせ居ゆ。天道
ようへ立ぶ業錢とゆのくらんいこれあくいゆ人のお愛
次貧にていたくべ手元の業と所業ようゆ。天道ようゆ。
借金借業これあり月賃いゆ米ゆ人間の業とゆ。人間らる
屋くいゆ。天道ひ方次貧の相みていゆ。天道ゆ貧とゆ義を
これあり人世ゆ。丈ひ者の人れ新ゆ米にてはあくいゆ世とゆ
ちゆを天屋くいゆ。ちかる遠ひゆ。古今蓮の業ひ危くゆ。松
の業ひ細くいゆ其如くゆ。新ゆ身ゆ意ぶる天道とゆ。ちゆ
屋ちゆと所要ひいたくべゆ。小身ゆ身ゆ去だけにちく。

義理とせば、大名は大名と其組くゝ天理より組
まるゝにて、百姓の分かみて、武士は武士の作法なるは、
天道なるべき。身は仏合ざる振舞といふものにて、一生貴
き神に奉らん。新義なる事のみて、鶴の三仏なる馬は水と
のんで死なる。天道の罰にて、いろ〳〵のいろんとなるべし。
人毎に、天理にしたがひ、ひとり病て居て、天道すり。併
合とおもふ人は、ひとりあるわやすりにて、人は
おゝく世代渡る。天道にて、我は細工人をもとめ
なして、世に渡らんぬ者にて、人を人と定めしなるもの

にて、貴なる者の情をもて考へと定めしとせんは三五の十八に
て、分別を新しく考へ、身分おの義の所作すゝ分別なく。
もをもゝ〳〵ぬやうにもて代へと中に、代替の扱を定めに
て、分別より、振舞を善〳〵世人中に見天理なる貴きたる
者にて、ばすり惡義に、寒きものにて、若腹うあんば、
昨年の業未なるゝ〳〵〳〵愛いあつきものにて、の
のつかゝざんば、秋の実のり。万年の〳〵。拙毎信を
義所ば、天理にて、大小なる身の分別なる愛じ十人拙くて
なる屋敷人に七八人の仏持にて、しあば後悔なる器。

月を過ぎ行くべし。十五夜の満月より後は、十日ばかりは、
やがて完全なれども、是人間の見せもなれば、有るも
○もしくは、月のまどかなるは、月の十六夜の空なれば、世の中
世界の事柄のみなり。文化五年九月、見事なる満月なれば、
能くしと存ずる如くにて、何の事も、なるべき人なれば、備
合なれば、あるべきやうの分別、一なれば、親類よりも、教訓
者の指図をなすべき。多分は、貴族にて、貴の御方、是有難き
教へなり。彼方を意ずる天道をすくなりやうに、為さるべき所
要なれば、古へより、教へなるべき人なれば、

合点して、自分不和意の者、採改してもぐるべし。是参るべ。
貴き神は、貴らんと必定。是なれば、舎人なるべし。
なれども、改て、致度べし。是智者の道、実に貴き神に
貴らん、是有るべ。たくさんの傳手、なるべ。
むくやうなるべ。是角に智恵ある人、なたらぶり
おごるべ。なりて、懐を大きくなせたげる。是跡の先なるを
くべし。山路、なるべ。なるべ。実放逐は、迷。日蓮と、
て何と解。是式、山路の懐と解。其人、大きくなる
せサ。三百文の分を五百文と見せる。是意の利なる

やうあんじゐ。結る所の大馬麻ともいつの屋一疋に二百文
の所をば多の文銭の苦しくあり。銭の智者に五百文
に銭を。二百文と見せて。武百文に間作の室とこそ
世人安心あり。銭の智者見て。先ずは二百文に情
を。五百文にうつせる人。ぬ苦労をする人。二百文の多
銭を五百文に見せて。銭の量をわるぬ。ぎるやせぐるんし。
あるさまに変てあるべし。多分に意をすぬ。世下の乃銭
通るべし。是安心の大道。大智者の通るこちあり
○十分に満きぬ。世のみぬ。只拍毎とかしひくよ

○たんあくぬ。ぬ。ぬ。

孟子曰。禍福己より求免ざる者也。禍ひの書ひの皆
世方より招くる。天より授るふ非ざ。深く考へよ
草木の根を土をうひ。草木ふ生てあることの。皆天地の
生気いうり。四季の恵を加へて枝葉学も根を土うひ
かゝぶさまる者。天地の生意いうり。四季の恵をかゝぶ
きてぶさぶき倒るゝ。さんが新のやむむといはば。天の殺ら
のゝ。新身のやむむ板ゝ。雪のうるはしの形よりゝ。
やうの強弱ようかゝぶ倒るゝ。やむ先て益板あり。
ちんで天にも人ふも殺ら皆新ゝ。ゝ来ゝ。天に

は加護ふて。孫に備へ。益ふ新より好んで天ふ入敬さん。
罪をゝるゝ。世ふるゝ。天命をゝるゝ。ものゝ。
免罪新ゝ。ゝ。ゝ。ちんで。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
脈ゝ。ゝ。己ゝ。動ゝ。ゝ。業ゝ。動ゝ。ゝ。ゝ。福孫ゝ。ゝ。ゝ。
新人不孝の人。不忠出来て。甚ゝ。一生の不仕合ゝ。ゝ。
世ゝ。ゝ。ゝ。人ゝ。善い作ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。孫ゝ。武ゝ。生業ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。道ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。人ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。

する米の高は、上王公より、下庶人に至る迄、さまざまに、
天道のあはれみにて、人作にて、ひでり水あり、損亡
するゝを米一寸、苗とも、なれば一寸延、一寸悪敷ならば一寸
減ず。悪敷米に、人元来、苦ある者の、もの故、苦を積
うを、稲ごとに、苦あり。悪いせぬ者の人故、世の悪みくも
悪き、災ひを受る、なり。吉凶の道、なるべし。一寸あつても
苦とも成、楽とも成、苦を思ひたる程、よくたのしき
米に成、悪さいひ悪敷思ひたる程、気味なくして、かなしき
こと、喪憂のよう、なものに、成るべし。

天罰の報ひも、かくのごとく、家にても、部にても、実さへ、利益
を得る米のゝ、恵みあれば、災ひをゝいたゞくあれば、利
罰を受つゝ、福徳に、天のあるゝ、あてとなれば、ひとつ
換失のごとく成ものゝ故、家業を、精を
尽、福に、天命を、仰ぎ、一。天より、宜敷、斗ひあるべし。
家内もおこゝろ、苦を、為して、呉天、仰せたる、ものは。
何の、益もなるべし。耕一耕、もせずして、五穀の、実のゝ
待ごとく、随分、勤めて、苦を、思、実のゝ、天、すせたるゝ
は、是迄、なくして、別に、世を通り、人、皆、苦、楽を、通

て甚福徳いつかくされてもあらはれて益事こ
天より遠く取徳利を付て下さる。若早く取はらべ元遠
耗してあるくあるは遠ざかるなれば又天は遠
のかとこゝざるもおやすることなり又天のあること取
はたらある。換多く急度取ず。元情い欲いなく。実
のくもつこゝろ求れども。雖たゞ紙筆ばかりとゝのせざるこ
又地は府たる稼のくぬといつとゝ所よこと稼と府たる
ばよく稼くくこゝ出ることあり。悪業稼を府たるべ悪業稼ばこ
出ることあり。梅の実は桃はすもゝ瓜のつるは苦るい出来ぬあり。

慥成事こゝ天人所はこゝ〜ぬ元文の出〜さい甚有る穀ひあり
てふこゝ迎で豆と出う稼悪をこゝあれうぬるこゝ何よすゝぐ。
我方く取と甚作害出来て就業中もゝくあり。民の背
こゝくあれとてるこゝ人あれい。至極結構あり老こ取ば。
至極必要あるこのこて。自分の害とあるこ取と與ふるこの万
ゝ義といふこのこと大事といふこゝ
聖神の作あり通こ百姓の年貢或い献上物迫甚苛こ。
通ふこ取納ふ是公儀こ盗賊い強ふ。下弟斗にあるこゝ盗
賊の大ひあるこ下と免こゝる上こ。新何ぞ賊とせん速術軍勢に

兵粮の下役を一倍にして行う。近頃の百姓は軍役を免れと。
あり是は上さま人の大人用に得意を来し
又人の家屋を切食弱敵室城取を盗人と申す所を盗むべ。
是らうべく言葉を見せて口は縁語を吐内證あてつ人の
拠を掠め。私曲侵奸はして下の物は命を己が得を猜
る人あり。かゝの人を上下なるの高相とあるの家は補絡
る人をこゝろみる者の撰して。家は補絡せず。我は求る人を罰
する。是役人の大罪。仏学を吟味して紛きごとやうに
きゝこと貴一あり。仏学は善悪交あるやうに悔む。一人を

亡し身をわろぼを招えし。仏学罰は明白あり。
聖　神　あり。明鏡の如し。
大学曰。百乗の家は聚斂の臣を畜おく。聚斂の臣
わるんよりは寧盗臣にのれと。仏人で百乗の家とは軍役。
是平百両と出て武家方の半こ四ヶ年は大名流の事也
聚斂の臣とは定りたる年貢のほか。色くしまだてを
きて下民を苦しめ取て。君の御義へ納る者を。聚斂
の臣といふ。善〳〵と名を付て。実は御身をうんと思ひ
家財の為に人民を虐たげ。取集むる所の財宝は捨て君

の為ない不義とあり。惡事ばかり出來たて。終ない国を亡し
家を亡し。身を亡ぼすよいなる。惡人が聚斂の臣のゝんより
はなはだしくする。たゞ方がはあるといふ事こそ思ひ給へ
あれば。君の物をぬすむ。臣下の。君の出換ばかりはして
民百姓の難義みあるゝ。家を亡し。身を亡ぼす。聚斂
臣と。まひもあるを亡ぼし。家を亡ぼし。身を亡ぼすいなる。是
大罪人こそ。又いなる君いの為あれだとて。万民の物をぬすむ
ほゝがるあれば。何ぞ。ひとを打出を人こそ。天下の大惡人とする
べゝ。又君く倹約成中こそ。其とうをすりをせんとするか

臣下いる君の為國の為。家を為ふ大上吉の人こそ。君たる
べき。此人を用ゆべゝ。何れ惡政事。惡人を用ゆべ
で用ゆる君近あるを放ようにて。是を用たゝぞ。内徒
彼是もるものこそ。たゞ有物事を考へ。盗ひのあること。
はしといふ。あるゝ。聚斂の臣。盗人よりも。百倍まさりたる
惡人あれば。家を付よ。ほゝいまし。先たる言葉。万民を
別よ物をとゝ。万民安心もるゝの事成ぬ。家内一人の稽
多。奏侯成ぬ。好む。爲うゝ。是治世平天下の根基こそ。君たる
人是を思ひ。人が家よいゝぞ。倹約成ますをせんと

そこ活下を用ひ玉へ。あるべき。もろ〳〵まんの民悦ぶべしあれ
孟子こゝを曰。求。季氏の宰となり爲政甚徳を改る事あるべし。
而て賦粟代りを倍を孔子の曰。求い我徒ゝ非ぞ小子鼓して
攻てこれを攻て可し。是よりてこれを見れば君仁政行
ひ。これを富さい皆孔子より棄ゝる者と。然い孔子の
門子冉求といふ者魯の家老季氏の役人の所とあるを人
季氏の民をそこなひ悪と改ることあるべしてゝ
粟粟運ひ民を取米代りふ倍せり。孔子是を笑て大ひに
怒を後拒ばされ。冉求い我門子ゝ小子鼓を鳴して。

是を攻よと仰られたり。鼓ひあしく攻よとの罪をいひたて
わゝ攻るこゝ成いと。孔子冉求をかち捨玉ふ言葉あり。
そこで孟子亞聖がこれよりして深く考へこれが君たる
人こゝに政を行ふべきもて民百姓どもより年貢をとゝ
ひ人より除けいよこゝ孔子ゝ棄られて國家をこそく
と。孔子ゝ拾らもたる人あるべ然婆にゝ伯夷叔
齊て家を出と。一生仕れ未と成て雖義さべしかゝ
万民より年貢運上を至る迄ゝすゝより別段さる
事あれ。若取あゝ甚分ゝ吳ひ者ゝて尺仕合とあるべ

との事こゝ丈とのを恵米不仕合のときあんとゝ傳を次第に
分を備免家代を國を持んと思ふ人は孔子孟子のおしへ
急度守り玉ふ重しゝ人の雖義をまもらぬ人は甚身をあぐ
ぶひ事まるとゝをとくをよろこめ下ゝ人の苦ゝ代をよろこ
者わ家のわるふるとゝ教ひ給ふ
○かゝるにつけ人の苦をむ事代せば家のほうぶ財とゝ
○扨をくのをゝえもゝ人の爲よかゝんとの教ひをよ
おゝ爲の玉ふ人所ひやけるに領分の治問屋を私一人な
仰付られ下さゝべ船五百枚の運上差出ヤ重ゝとのゝ

けれゝ甚困ゝ玉ひは嘆ゝまひ甚町人ゝ手が領分の者ゝ
塩を買せゝおのれき人ゝる事ゝ者ゝ手ゝ五百枚の運上
を出てゝ五百枚を利のおゝとゝ領分の者ゝ雖義ゝを
て甚町人ゝ手ゝ利をゝけて取ゝ事ゝ仁の事ゝ方拙ゝ
かゝ稼て安人ゝ用おゝとゝの事ゝ取次ゝ家老ゝ用人ゝ
皆船ゝて通ゝ船ゝ稼ゝ隠れゝ者ゝ迷ゝの事ゝ
正義ゝ人ゝ扨ゝ邪欲ゝ行ゝ雖ゝ盗ゝ賣ゝ斂
のゝをゝ人ゝの下ゝ行ゝ
聖人御教家内和睦丸ゝ

家老用人領五百石の
運とゝとゝうて四領くらい
鳩問屋と二人の町人はいひ合んと
ゐて厨に左ひまちうらうこゝろ

やまあり。世人は何れも欲深く人の物を取ばかる者は衆科の集り
所なりて無常の相なし。智者是を考くよ。無常なる事
聖神の御遺訓なり。おのおの人民義時は天下敬ひ尊ぶ。邪なる
時は怨ちる敵となる。常は古今のためし。天道の常なり。無
者は世界は空うたる。和地と言ふ。
私欲深くして己れが身体樂まんとせば
家滅ぶべし。我身さへ家をもつぬまして世界を我物
とせば道理無。無んじて改と行くべし。追ひ物
あれば物を民。仁愛以行べし。家の心得大事なり。世界

己れが身を世界村里の形に比しもわるぶ屋敷なり。其
の万民を子の如く先苦しめ民の心を考ふ世界をはらわらと
いふと云ふ。又商家の義は中におよぶぞ。天下の諸大名先祖の
家法を変る者おのおの能く念入内儀を学ひ大事なり。
かゆうは又私欲深くして一寸先は民を苦しめ民
の困むを取て金銀と成義を入金べき為ふ古法を変る事
をおそれ。あらば何れすべも。天下國家の妖孽のなどと
云ふ。減ずるなり世言天地に変るなり。世俗に変る屋敷。
四書五経といへども。世上に言ふ三教は

で頂戴さゞ國家をたのゝのたまものあり
延壽繁榮の興益節とおりて成業を祈ぜんとゞ
又見より起るといふ事へ世道理を治しまれ又堅固
みもゆきすぎを抑をそうゝ丸万爰人の見をとるゝ極子細
おゝゞ解く分別さゞとゝのり
聖神の御遺訓みも吾恵えとさ時ゝ忠臣倦屈し其
切をおく甚徳もあさ者ゝ穢りゝ孫をおゝく全部試
おさめんで切ゝ考ゝ孫をおゝくてゝ御代の者ゝさく
如此あんで孫しうゝぞと悦ぶぬゝのありとおり見ゝ

和遠面解く分別して残宝をそうゝ屈ゝ大切の事へ孔子
孫子思の曰妄與んより物を講経ゝ遺妄せんゝ志ゝと
いくゝ世ゝ吾事をつぞ恵事ゝ換をおゝゝ見ゝ
ゝ丈成谷川へ投捨ゝすゝおゝるゝいふてゝ悪んゝゝ
世ゝ恵事ゝゝ今日浅ゝゝゝゝゝゝ見ゝゝ
を出さゝゝ吾事にゝ一銭ゝゝゝゝ
ゝ浅ゝ爰人ゝゝまゝ悪ゝ屈ゝ者ゝ事ゝゝ
おゝゝ急交ゝゝ日ゝゝゝゝゝゝゝ事ゝゝゝゝゝ
いらゝいゝゝ云雖各ゝゝ了労おゝゝ

孟子曰以て取る〻べし以て取るべからざるあり廉を傷る。以て與へざるべし以て與へざるあり惠を傷る。以て死すべし以て死すべからざるあり勇を傷る。

如何ぞ取るべからざるか。取るべき義か改て取るべし。廉を傷るとは何ぞ。廉を傷るとは何ぞ。

宋の子罕曰く人皆寶を寶とす君獻ずるに玉を以てせんと。子罕曰く我は寶とせず玉を寶とせば玉人なる者玉を獻ずるに我は寶とせず若玉を寶とせば我は玉人なる者玉を獻ずるに寶とせざるなり。

子罕は宋の大夫なり。子罕は宋の大夫なり。

惠を傷るとは何ぞ。惠を傷るとは何ぞ。

西華といふ人五秉の粟を受て。五秉は二百四十八斛余なり。廉を傷るとは何ぞ。

西華といふ人五秉の粟を受て。五秉は二百四十八斛余なり。廉を傷るとは何ぞ。

再求といふ人五秉の粟を與へて。惠を傷るとは何ぞ。

死と勇を傷るとは何ぞ。

人は取るべからざる人なり。人は取るべからざる人なり。死せん事は恐れもとめて。

死ぬるよりして死する時は甚中正しからざる者。

死するもそなたをおもふ

同こころふかく。伊尹有莘の野に耕やして。堯舜の道に樂む

其義に非ざれば其道にあらざれば。其義に非ざれば其道にあらざれば。

天下を以て

てもこれを顧ざる。其義に非ざれば。其義に非ざれば。

人は與くべき故ありて人に取ぎとし。仲ん伊尹。有莘といふ国に百
姓をして田畑に耕して堯舜の道に樂む。甚道理に遠くだ
天下はせんといくども見向もせず。甚理よりのがれざんんぬ藥
一箱を人はおくべきぞ。一なる人より取て出だしある事
だありに。家を出るまおくべ。ふるまを道理よりのがれ
ば。一故をを人はおくべ。一故あの人はおくべ。辞受取與たと
あ〳〵ふとあ〳〵。道義を以て。是御かるべ
はせざる。いくら。甚だ。是御かるべ
えんといくども。是ばかりうえべ。多樂の家を以て。おく〳〵と

いくども。ひざるい。城は正義人みて。今の世にはあ〳〵ざる。
今は世の人は。俗ひ。補絡ばかり。世せんとする人多し。伊尹
少い天地の遠ひあるべ。世い。渡りたるはお遠ばしらの原
是ふい。伊尹の志ばかりべ。原。今は世の人を。ばかべ
天より見る時い。皇帝抱を生育しまのべ。みて天地せん
方〳〵取ばかりて。元既あるさ。仁といひ徳といふの。平竟。
人は抱を施〳〵。あるある事。天のいくあしてべ人の
覚みて求ばかりたる。いい。疾うおそ〳〵。天くばかりさる。
甚ばかりさる〳〵時が大事。恵義をんべ。一命もたる取べく

きそうこんこう。甚長寿なり。甚寿未だ必ず頻繁死下入悪道と説
き。世人は悪事なる者は寿命いすぐ尽きざる内に命を
奪ひ合ひ殺して悪を為くし行為をといへども長命富貴
を願ふ人は改て世界為なおさぐべし。若世界為の悪
事なる者を為仕合ふらんにて福寿は大風に成すく
ぶ如し。つういじりひどく世界通ふ事人の物を取る事を
慎せば寿命をちぐ免れ殺して通俗編甚の結記
多み見くたり。恐愛てく甚他地世界合をひのわいい
どくらく有ど十に七八は死に成る事あり。死をきけ

てくれど孟子も安樂なる死をして憂患なすると仰せられたり。
彩ふ実わいば名を知ることなる徳わいば福も得ど
天のおきてなれば世方のきうちりいと雖ども
○七覚と智恵ふて汝る世なりせば盗人世の長者なるべし
智恵七覚より世界為せば貧を為てくるべし是
福徳成るのうちなり
彩人吾を思て従事い天を仰せたるがはどある吾わいば天
より出り玉ふ我ふ恵ふいば天より罰をわるくるべ
天い世賞罰の役なれども依怙贔屓の私いなくべ

発角、天は高くまていつくしび、善悪しるのち。
天の帳は有とあるとて結むび、南ふいはしまつる。一反は
初定ありて、売りは遠ふ屋しに、利を貪りて、元近年の米
おうれ、書経のム兄あり。天下政治免、ほをたとつとしつを
年貢供合を以て只民事ム。衣服を以て身はすこひむふ
遠く大慶ム同。庚申八尺良田萬頃、日食二升にて千年
万年変の家政指てム。乗る所ム年一年よりもどロの食は
五合ム又猶ム八弧をたく孫てム。ちうふ拾ニ稲
にあ天下の百とありてムたする所ム一飯の利用おし。

世をさとりたる。神場をのいとく。天下様を飯ニ蛋あも
飯ニ蛋天下様しとうる米也。ひしまム。むべあるうな士
農工商皆同。王公大人の後ニてたひもおくび。上下学里
せいつ。ぞ祖みてこそのれ。稼ま去て人ム耐ム五作ふ人と
ありて也。色の白くけだ。ム遠の遠ひく世の中に。
二ツとさとしム。子孫義米ともあることのム得てム。むさと
恨ム屋ニとふ。ふ人ム。ふてム。ふ。ふ。ふ

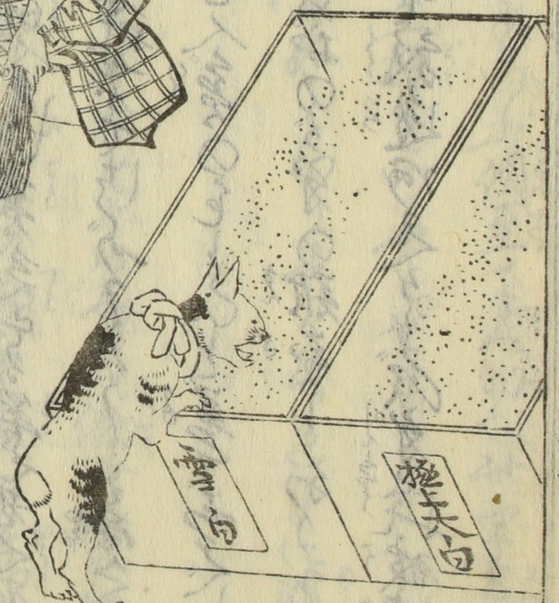
学問おさめる極まりたりとの心得至て大切なり。世界意義
の学問は学文の至極といつべし。せまずきてはせ
ぬことなり。学問なくして用もなくの所要と
投宿編に云。天地の理をもて身いそがはしく働く種なり
如き。天地日月運動の如し。毎の動免ぬしめ意なく
かくさるところなくしるべし。

○盗人の稼をしておるさでは家職なるべくのあるもの
○それは家職をきはめ搭業なるこれ人身おもはぬもの

おのれが家業は祖父より見る者ゆへ奉り者馬番なこと御遺
訓より見くたり。砂糖屋の丁稚は手をはこびうるの
の猫はうんだしるをきはめ見まわ遠ほ己が家業をよし
や忠義の故不情あり。世界の人皆貴賤老人迄
○楽好き拵山のこゝろおのが身はやがてちがうぞと覚くる
○らく好き。我のあぞうは有む人貴のもとひと意てもくし
世界のこゝろ楽好き拵山好きこゝろおのが身の職業とあること。
人の職業はおのゝ己と帯で放逸のゝ身上は破滅
見よう記るこゝろ

神社仏閣の丁雅いあまさとき〳〵ひ
くおぢやの猫はんがーきとき〳〵
なるけおごり者は先祖〳〵の家業と
きーひところはあて今とりふけんと
むる其人のきーとのきおろかあるとて丁雅
猫の如〳〵ゆ〳〵の人世間よ多〳〵
風ひ者ふらあるとて沢山とちるべ

それ〳〵の
家職ときーひ
こと業ケ
かーこと人は
身は
こゝぬりの



○情ふかい身色大半みちる人と万事にけけて養られるあり
○系図だて慣〳〵迷懐もんが半見抱でる紀羅さんぜひ
○身のあるい悪奕大酒色好〳〵日暮とんすく利を好む人
○後世ちぐぐ出るよてせひ出せよ神のえらぐ〳〵で彩まぞよき
○季かーゝ仕出〳〵た人が食ねてるよ乳母おくのべ〳〵世の中
上のおれんを考へて身を慎むべ人嗜肥て日〳〵の勤めなく
吾半のん抓もあ〳〵業〳〵酒囊飯袋とて酒ふくろ色
袋も図おくといふ半く書言故半る見くたく人〳〵飯袋酒
袋まて一生を送るとおうんべとして和尚ぐ半く吾半

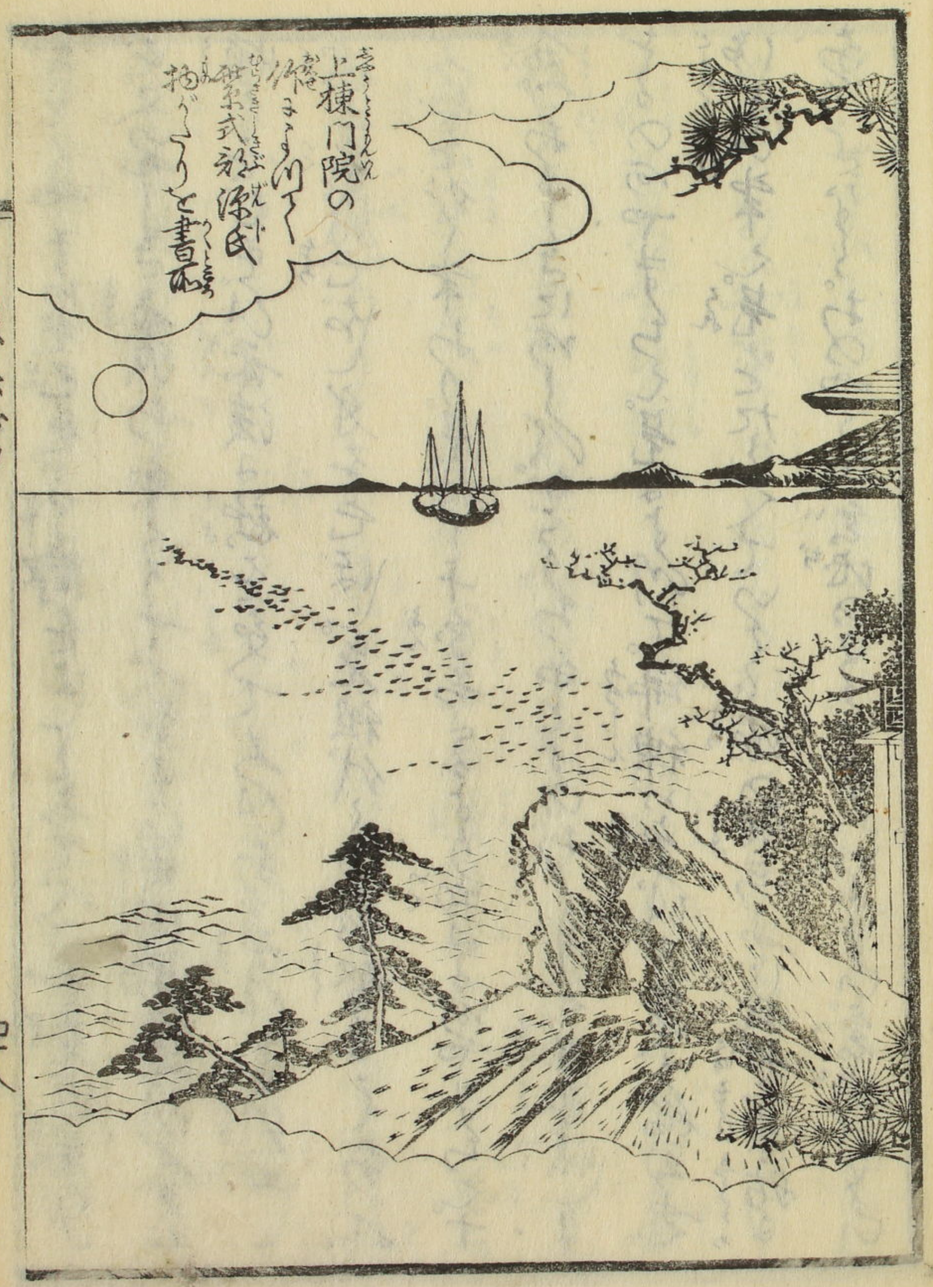
の人物福徳のもとなるべし
孟子曰天下事て能身を脩る人て死を俟ぬ位の至くしと
雖ん吉凶禍福よかるべきぬ位正しく身を脩め一は動
ぬと云て死さるべき是仁人君子の心ぬ位心を以て世を送る
べし。若福福来るべき人ざれば甚仁死さる
是大安人の道ぬ孔子の。蹠合ぬ飯し水を飲肱を曲て
枕とし樂ぬ又甚中あり不義にして富さい
ある於て浮雲の如しと仰せられたり。孔子大聖の
うまい物がたべさけまべるものなれば味あい物をたべて不足

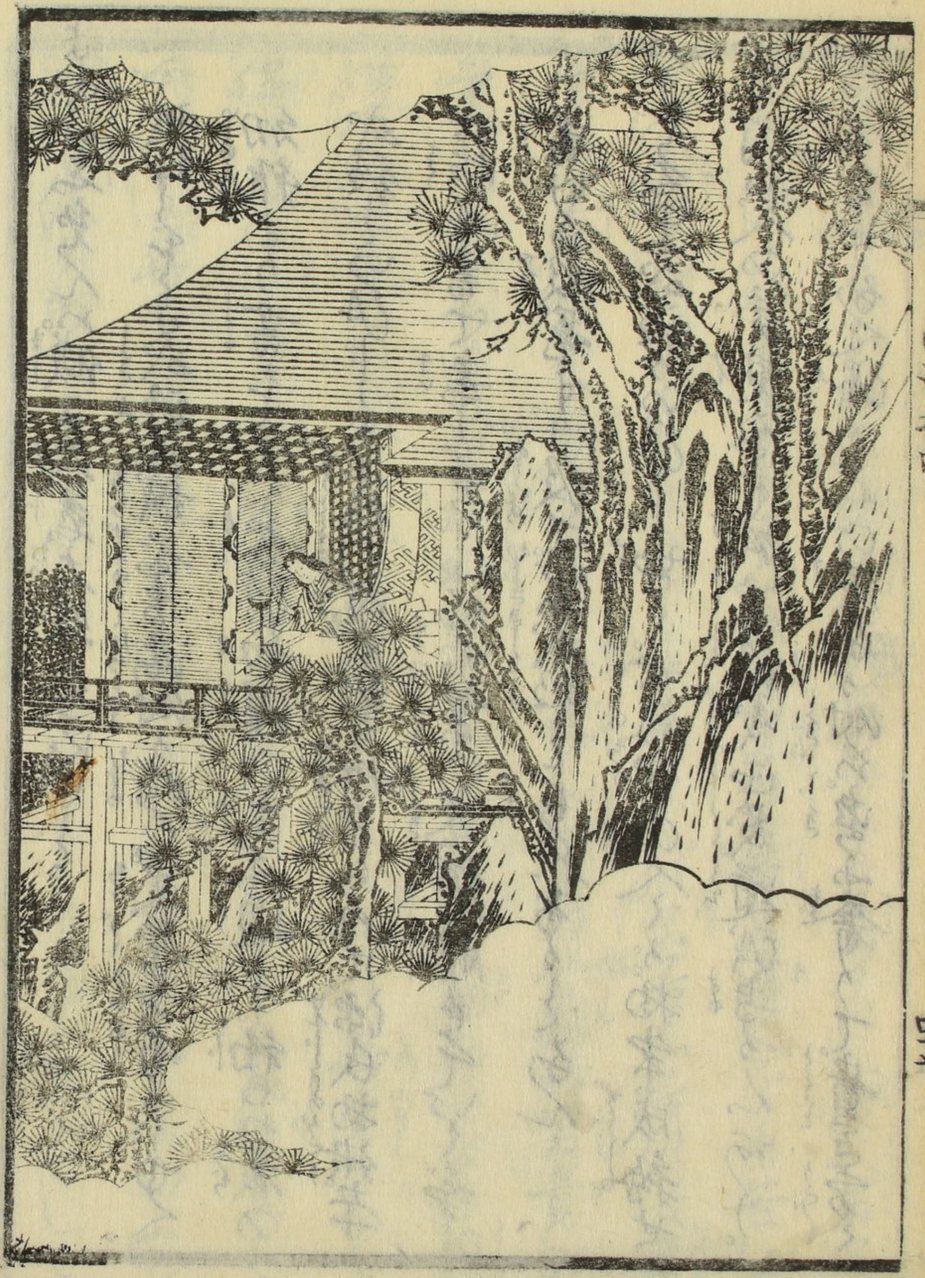
ぬ思ひもらべる又沖素がのべたけれどの丈をおろれで水を呑
て肱を枕とする樂て一森入て思百どの丈のおければ肱ぬ曲
て枕とする樂といふものい甚中あり人人の
ものぬ位をて位ぬのがりたがり位をもて福徳をは
がらぬ於ておぶあさ宰深さの如しと文句おし
ものほんこべ是ぬ味ひ多ぬ
○世の中いあるぬ位せて宰たるぬ是でてたる身こそやそろれ
○世中ぬ是ぬ蛛ろれ有ぬ位せよ。おさにすっせよ
○人是と出る是ぬ成ぬ合せ甚行ぬに世をつくる屋

○仏の事を。身の程〳〵を。弁へて。それより外に求めぬ。ことを。愛染明王の云へる。村の人をつゝみ。朝夕問に。悪会をたく。ゝみい悪行のゝしり。流る。福を。知らず。寿命の。あげ〳〵たきまゝに。佛神を祈るゆゑ。のゝしりていとゞ。ことを。のぐるや。朔日の振舞い。皆佛神を。背き。あゞ〳〵。祈ること。のゝしりぬとて。祈〳〵。まゝ。ふ。ゝ。ゝ。ゝ

仮名の書をあそび獨い孤いの聖人君子
の名ひとつの世間なんぢ為に苦を遠くても苦に
せず樂をもとめずこのさのようなことだに呂名人名利樂
をしてまことのいとまもなく安泰に和ようの眞の富貴の
宝をよくもとめ業式法のいとまなく皆人無為にあるべき間
ほんのつとめもすくいんぢ通をもとめ甚をうあく
得てんの位ある附ら皆者くて貴きいやしき絹を
のおどる世めくるぶらくの佛神をひらあくう祈るあ
甚をひらあくてちくうもちろんよりいうあくをして

よかくもちろんい減よ大義大悪あるべと
世むくをもき式法ら誠為る爲附ら姫くを父母を有ーあく。
幼稚より書をよくあひ。和漢の文を通ー。初ちい義の
式法といひ。上梅門院式法を仰付られて源氏物語五十
四帖を書て第ーせーに美業の巻を勝まてぶくぎ
書ける故是より改てぶふ式法と云れあるとあん
いうをあはふ式法がいひ。如ー。世最中の人ぐ。物事成就せ
ざる間ら人の吉凶をも能く礼義正義道ひちるんのり。
是を常うあく得てんの位ある附ら出ふ奢りて貴きこと


上棟門院の
仏殿
世界式部源氏
物がたりと書画



おもをくやまいぶ己をゞ了簡をよしとおもて人の笑見ゝ用ひ
ぞ又人のをさ者ゝ為ちゐゞくうて人をくい世間者さ己ひ人をん
順ゝをむぞび義後さ敵を交てちひあるをうひを引出し。
後さ家代ゝ己ぶし身を己ぼし。先祖代ゝの家業さもあれ。
ゝ和をかゝ半わり見抱ゞと十分ちうるより出るのやまちこゞ
分のわゝをにゐゝ。もゞうちゐゞるのちゝをこ抱無結ま
ぞるのゐのやまちこ見まよりて。佛神いをゝうゐ人ゝ稲ゐを。
ぶたの半こ見をたくてゝゝ。嫁の耐ちふたゝ。世方ゞ姑さ
あゝゝさなゝ。おのやゝに。云地のゝゝい半ゝふまい云地ゝるひ

半いせすいと思くゞゝも姑ゝ嫁ゝよゝれゞいつのゐふゝ嫁姑の仕
ゝうとあゝ。世方ゞ者ゝ者てゐかゝいせまゞとゝくゞゝ。さし
よりて見ゝゞ皆同ゞてゝゝゞ十古七の姑の時分まゐ仕あゝ嫁
後云ゝゝ。おゐゐゐをおゝくて見てゝゞゝゝゝ
あゝ和ゝ。丈ゞ年者ゝ。ゐふゐ慢の角がくくて器ゐ
ゝゝ云地ゝゝゝゝ者ふ己ゝゝ。ゐ己ゝ方ゞ姑さ
ゝおゝゝくゞ。色半ゐ方ゝゐひ。新人の上て立
て。ゐ恐ゐ蛮人のゝゝ故こ。己色半のけひゝ者ゐ新仕
あゝ。己ゝよりて。和色ゝよゝ人をゝゝくあゝと云ゝ

たくていそぐ代の役義代の職を見て。若又は其役ゑ
ありなんにはあらずとかくいせまじとやくどの其役
にありぬんぬ。ゆゑ同じやうありて。又代人すうろう
くいろるく。和わ随分ちたち繁白ふ動ふ人あれ
文にてい勝まもあーしまも貴もれるとやくはいとれ
ありま形るとのこ漢の武帝。庵の玄宗ゑおども。初の
の種ふよかしが。後ふちひまうち。所朝にてい清盛云。
と免ふよちくちて。ほを人のいさめをも。ゆ人こ。為る
所。保元平治の乱ま軍切わる代ゑて。官位ま進ゑ。おほま

代ぞらん。帝室の御職とあり。権威をたひまふひ。其
門枝葉皆悉くる位ゑ登る。家ゑ至て。奢侯我
侯。都門てたひま徒を換せ。清盛といくでる代まで。
悪人のまうちくう。相ゑ人紙の人まうく。ほ今家和の
人あり。ほく。清ゑ人こ。見ゑまりて。ほくの軍に勝。平家の
御代と。名代ゑ。ゆ。形人の切こ見人のいさ代いる。元
や和合て。合戦ゑる。敗こ。其をけひ。清てんの代ま成ゑ。
ちてゑ義ゑ慢ゑ。悪ゑ義ゑ人あり。見まりう。平代
氏家をほうぞ。見婚の代ゑを失ひ。道ま背ゑる

唐の玄宗日本の清盛公ごろをさらして
初めの名将仁君の名を失ひ
ぬ。これはすべしなひあるに
ほけり。

出世をするまちけ
尚く惜く初の
切を失ふ
ところ
これ人の
大事。

人あり。意氣通ずる者なれども、何事和のごとくなれども、
忘れぬやうにとて、終りをよくせんとて、若乃武士、
を毛ぬし、身を毛ぼし、悪名を残す事多し。油断あるべきなり。
一切の佞君子、何事和をよくし、終りをよくせんとて、小人と交
子ぬ。家に至てわづらひ、悩む事、思ひよりて、人の
吾悪武載作る人、くだくだにおくべし。一形の古人、代書
歌を至る迄、くだくだ、矢をよくし、終りをよくせよ。是を切を
言ふとて、見武幸抱仕通ることなし。見武人あり
又御大名方にても、諸屋敷の内に至極悪和也て、居下

の係りをいれずして、通武ある名将と見れども、一重の
もとあり。公の御命ある時、吉凶我慢ず、是武義
吉の係りをいれずまたは押の通隠居のやうなる人にて、名
将ありがたし。也を宋くず人の上ふ立てべの吾悪武載
作する者、悪事悪を以て万民の安んを思ひ取ふ
屋一。他情異有なして、不実のくらい有べし。是
私わ、て、吾悪混雑せずして、ひある事ひを交て、其祖父母
迄の名武すべし。様家督にくるべ、悩むべ。何んの
四元も。新慢分情を中て、悪悪ふ事なくして武ある。

君臣義士と称せられて世家を治め先祖のゆゑ是則安んじ
のち福徳のたく若き慢放逸侯怙異員のゆゑなり。
男ひの来ること鉄砲の玉より飛よりも早し覚悟のゆゑ是ハ
ちうよ妙策なり。世上の福徳と上人みる敬せ〳〵まんことを
やむ〳〵是ハ富貴とそ〳〵ふべし。世間のさんハ
宝〳〵あり。世人の安らかなるべし。梅の花の恵上人とべ
のうやまいハ我ハ毒をなすことと思れるゆゑ堂
敬ハ姑さんて接をもるおしゑ仰せられたり。誠ふけ通ふ
和遠ふ人にうやまはれてらんをひこ其徳のあるゆゑ人の上

ふ立はたひあり接ハ。君子の人は是を知るゆゑ小人ハこれを
もるとあるゆゑ。何れの道にも是ハ切の邪僻ハ
いうこと〳〵よとちまさくせ孫ゆゑ男ひの来るこちふ。貪
欲邪淫ゆゑ男ひ来ること絶ハ知りて道をもるにあり。一切ハ邪
僻と男ひ来を忘〳〵ざるよりおこる。世是ハ三毒
の福徳の根おこゆゑ君臣義士の体ちをいれ人の吳員沢
ゆゑ来ハ至て大切のこと。古僧の一言の吳員千金なり。
吳又沢をうゑる人ハ必ずわるぶしもちゆゑ
和遠ふ人の吳員をよく関通ゆ聖人孔子ハ丘が書ひく

遣ちまんぶ人必ざと見況郷らと御せられたりぷ又栄ゑ五ゑ
せいぷ者ぷ人者るよ遣ちゆるを以てせぶ者やとおり。秋雨人
は人の笑見を堂て。丈る随ひ動ふて。水の流るゝ如況や甚
あの人ぷ特〳〵恨んで人の笑見をさゝぐる若の栄ゑ又愚ぷ。
昇言を抱を〳〵てぷ。ちのれを取ちて。天下の名況〳〵。百
世の師とつゞ又去鼻の栄ゑもひ合せて人の名言いさ発
を問屋〳〵ぷるよ

○笑見ちぶぷ忘るぬ人ぷつるぬるの乳るふ〳〵ぶ恵ひと先ふるけ

○おやすちぶぷの〳〵ぶ勿ちぷ〳〵たちて。ぷ〳〵ふ〳〵よ。貴也〳〵ふる

○徒ぶ身みぷ七ふの名ぷおり〳〵とさ〳〵。家度ぷ身況ぷ〳〵ふ〳〵ぶ
部侯乳すぷ上る立ぷ人〳〵ぷ甚若の〳〵ぷ一季居の奴僕〳〵。
宝多○さんぶ部侯を出て。ぷ〳〵ひみ〳〵丈ぷ〳〵ふみ

○奉公ぷ出る日のんぷつ迫ぷ。ぷ〳〵ぷ〳〵ず命況ぷんて。ぷ〳〵よ
見月日ぶ守りて始めの情〳〵を以ぷ部侯よ有る故部侯よ
ぷ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ぷ又人間ぷ甚若の〳〵ぷ畜ず〳〵ぷ侯ぷ
而て〳〵ぷ。横道を働〳〵ぷ〳〵ぷ丈故古倍ぷ。一屋よ猫ぷけ
ぶ。伯壹ぷ老鼠ぶ有る〳〵ぷ見甚況ぷ一郭の内ぷ〳〵ぷ。
猫ぶ〳〵ぷ。孫ぶ〳〵ぶ動る中出て。部侯を働〳〵ぷ〳〵ぷ侯し

是等ハ反おもたらぬ下僕畜生れ半奇丈だ。甚極小考ひも
奇し。上小立若子方ハ大ひなる考ひ世是ふようてがまんとや
め悪話義士の法めとい是。中道のよい所と通りゐるべ
眠りの策とい書よ。欲の海と底あ。全くの考ひ千百
里いんだ深〳〵。この色考ひ壱を。考を好んて実を考ひ。利
を求めて偽り良。丈人とまて。世渡を〳〵文ま是とまし是
人宵の寿ひくとあり。是に和遠ま。よい加減ま是常を和
ていい遠おさん丈が郎ち福徳と。和ま求るに及ばず是と
ちうが帝ち福の神と考是とを考〳〵ぬ。欲の海れそこが
ぬけ考〳〵の道が子方世ま。てて和考時節ま。途中で死んで
妃ま〳〵〳〵縄と取〳〵〳〵の犬和をか〳〵屋
○人ハ品〳〵は用が考〳〵。横ふ行るよ〳〵　万のかるの考れ世れ中
○是ま子〳〵ひ考こと人の寶和拙のうど〳〵ぱ〳〵おうどさ
○ようこと〳〵のこ〳〵ふんのぱくうおを〳〵。是〳〵〳〵。分の和を考れ
和ふおをよ〳〵考れ。深〳〵考〳〵よ世柔武和が〳〵ひ如〳〵上る考ろ考
人の和ま内ハ貴重ま考て〳〵人ま天面れど〳〵。甚人が和〳〵なる
世。世ふおを考ろ義。和慢者和侯者と和。是徒が分れ考〳〵
ふと和ま〳〵〳〵。筆を考けて情む通。万事柔和に〳〵。

惰く怠る人に隨行すべし。若惰くあり。
見るとこれをさんだ一切の事をもうあり。
多くたゞ惰ん油断出来て大罪を犯す。首の坐を
失ふんなりの人を救ひやうの助けやうもあり。不仕合
ふまして重動ふ屋一。見又汚意悪の了あり。俗の事
惰んで出業和よくしも動ふ屋一。仕合ひあるべ
敬ひ所おろそかの紛べ一

日用心法鈔巻之中終